



図-1 セブン-イレブンの環境対策¹⁾

直しとなった。また、飼料ができあがってからも分析や配合条件で販売が進まなかったが、宮崎大学農学部・宮崎県・同県の試験場と地元の生産者(養豚家)の協力で養豚家に評価してもらえるまでになった。組合の仕組みは図-2のとおりとなる。

東京都23区内の900店を一括で取りまとめた店舗からの販売期限切れ商品のリサイクルは、千葉県や八街市で東京地区を担当する廃棄物事業者が開設し、日量約15tを地元の酪農・畜産農家から集まるふん尿とともに堆肥化処理が行われている。回収は週6回行われているが分別の課題を解決し将来は飼料化を目指しているため、冷蔵車回収を行っている。生産された堆肥は近隣地域の農家に利用してもらい、サラダ・惣菜を生産する工場へ野菜を配送する卸業者に農家は野菜の出荷を始めている。店舗からの回収は、図-3-1、図-3-2のように分別・リサイクル処理が行われる仕組みとなっている。